
俺を困らせるヤンデレな幼馴染

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺を困らせるヤンデレな幼馴染

【Nコード】

N9770U

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

俺、藤崎洋はごく普通の少年なのだが、少し非日常な所が有る。それは……ヤンデレの幼馴染が同居してるとこ！おまけに少しエロい？「マジでやめてくれー！！！！」今、最強のヤンデレかは分からないけどとにかくヤンデレな少女と普通の少年との高校ライフがもう始まっている！

清々しくない朝！（前書き）

始めました、よろしくお願いします

清々しくない朝！

早速だが自己紹介と行こう

俺の名前は藤崎洋^{ふじさきやう}。まあごく普通の最近高校生になった少年だ。そう、ごく普通の少年なのだが、例えごく普通の高校生で会っても某ラノベの主人公の様に非日常を送る高校生がいないとは言えない。まあその一人が俺だ、非日常であっても死ぬとかそういう系の事はないのだが（精神的に死ぬ事はあるけど）……いや、思い出すだけで頭が痛い

そんな訳で今日も清々しい朝を迎えた俺であつたのだが……

あれ？なんか柔らかいものが当たってるよ？きっと気のせいだよ気のせい。

「えへへ〜」

声が出たが無視無視、きつと空耳だろ

「洋くん起きてないし、いろんな事できてるよ」ダメだろ！」起きてたんだ……」

いや、何故そこで残念がる？

「ってか、何でお前が俺の布団の中にいるんだ！」

「寝起きドツキリだよー」

「いらんないから！」

「えー」

ここで寝起きドッキリをやる馬鹿野郎の名前は葵^{あおい}星^{せい}香^か俺の幼馴染兼同級生兼同じ家に住む少女だ。普通にすれば美少女コンテストベストテンに輝くと思われる少女でもある。いや、皆の前では普通を装っているのだが……俺の前になると、すんごく変化する。ちなみに星香は幼い頃、両親をなくしているため、母さんが引き取ったらしい。

「ってか離れるよ！」

「いやだもん」

いやだもん、じゃねえーよ！ちょっと萌えてしまったじゃん！あー情けねえ！

「あと、柔らかいものが当たってるから！」

「柔らかいもの？何なのかな？それは？」

絶対に知ってやがるよこいつ、知ってて言ってるやがる

「あーもう！とにかく離せて、ってか何してたんだ？お前は」

「洋くんの大事なものを奪おうとしてた」

奪うな！起きてて良かった！本当に良かった、神に感謝！

「じゃあ寝起きドツキリはここまでにして、朝食作ってくるから」

「ハイハイ」

そう言つて星香が部屋から出ると、俺に幸せな時間が訪れた。いや、待てよ？星香が朝食を作る？これってまさか

ガチャ

すぐさまドアを開けてリビングに向かうと

「え？どうしたの？」

とつさに何かを隠す星香

「星香、今何を隠したんだ？」

「何の事かな？」

「見せなさい」

「いやだ」

「見せなさい」

「いやだ」

「見せなさい」

「いやだ」

疲れて来たので強硬手段に

「早く見せろって!」

星香の近くに行つて取るうとする

「洋くんってエッチだったんだね〜女子に抱きつくうとするなんて見損なつたよ」

「星香……」

しょうがn……ダメだ!そんな事したら俺がどうかなってしてしまう!
絶対星香のペースに惑わされるな!

「見せろって!」

男としてのプライドを捨て星香に抱きつくようなじゃないような体制になつてそのビンを取る

「もー洋くん大胆なんだから」

変な事言つてる変な少女がいるけど気のせいだよ。うん、きつと気のせいだ。無視してラベルをみると

『飲んだ後、初めて見た人に欲情してしまう薬』

……誰が作つたんだこれ!普通に有り得ない!ってか有り得ぢゃいけない!

「友達から貰ったの」

「どんな友達だよ!」

誰もが納得いく突っ込みを入れる俺、すぐさま取り上げて自分は冷蔵庫に入っている安いパンを取って食べたのだが……

「洋くん」

何故か星香の顔が赤い……まさか

「星香の朝食にもあの薬入ってたの?」

「うん、だから……」

「だから?」

「一緒に楽しい事……しよ?」

星香はもうダメだ、回復の兆しが見られないから……

「行つて来まーす」

「あ!逃げるな!」

「普通逃げるだろ!」

と言って逃げ回ったがついに捕まった俺が何されたのかは神の溝知るってとこだ!

清々しくない朝！（後書き）

感想などよろしく

学校へ行くためには！

「はぁー」

深いため息をつく。星香の神の溝知る行為から何とか抜け出して、学校に行くための準備をしている。何しろ心配なのだ、星香がこの家に居候している事が分かると、俺の命の保証が持てない。しかもヤンデレと来た。絶対に死ぬ！！！！

「洋くん用意できた」

「ちよいと待て！」

星香も欲情してる前の状況に戻り（それでも危険な事には変わりはない）いつも通りの朝に戻る。親はほぼ出張して戻るのは少ない。

「じゃー！」

顔を洗い星香が待っている玄関前に急ぐ。やばい時間が危ない！遅れると先生に宿題が……！！！！

「さあ急いっつ洋くん」

「誰のせいで遅れたと思ってんだ！」

「え？誰」

「お前だ！」

軽く突っ込みダッシュしようとする

「ちよつ星香、手を離せ」

「嫌だよ！」

「お前は赤ちゃんか！」

「だって最近洋くと手つないでないから」

「もう高校生だろ？一人で歩け」

「嫌だ、じゃないと学校で……」

「はい、分かりました！全ては星香様の仰せのままに！」

「それでいいんだよ」

こいつが学校でする事としたら俺の大切な高校ライフが潰れるような事ばかりだ。実際に中学生の頃、俺が一度固く断ったら

『ちよつと洋くん、手つないで見て？』

『いいけど……』

ハテナマークを頭上に現しながら手をつなぐと

グチャ

『えっ？』

『瞬間接着剤だよ。もう私と洋くんは一生離れない』

『えー！！！！！！！！！！！』

その後、よく覚えてないけど一週間程、寝る時も食べる時もくっつかないといけなくなってしまった。ベットで何度も俺の初めてを奪われそうになったり……大変だった……

そんな俺の黒歴史を思い出しつつ、ダッシュしていると

「「待て！」」

その言葉に俺と星香は振り向くと

「お前のその幻想をぶち殺す！！！」

とか言っつて俺に殴りかかって来た。それを華麗に避ける。っつかおい！これはラノベじゃねーぞ！ましてや二次創作でもない！

「通りすがりの仮面ライダーだ！」

次に来たのはもはや、星香より手遅れと言っても過言ではない、ただベルトをつけているだけの痛い仮面ライダー出現！これまた華麗に避ける

「くっ！痛い！よくも！」

「てめえらが喧嘩売って来たんだろーが！っつかテメーら誰だ？」

そう唱えながら星香は相手を……

バキッ！ボコッ！ドコッ！バシュ！……

「ふう、間に合った」

「良かった〜一時はどうなるかと思ったね」

「あ……ああそうだな」

オタ研の代表は一生顔は戻らないだろうな……

学校で！

「はぁー」

深くため息をつく事とオタ研の醜い顔を思い出す事を無意識にやりながら星香と共に教室まで歩くのだが……

「星香……手を離してくれない？」

そう、星香がまだ手をつないでいたのだ。ホントなら離せバカやる
「……………」！と言いたい所だが、こういう時、俺は星香に
低姿勢で言わねばならない。言わなければどうなるか目に見えてる。
いや、恐怖で考える事が出来ない。流石星香

「あ、ゴメンゴメン」

だが星香は手を離してくれた。そりゃもうごく普通の幼馴染のよう
に。だが現実はその甘くはない。学校だけは普通の幼馴染で接して
来て、家などの所では普通ではない幼馴染で接して来る。ある意味
学校だけは俺のオアシスだな。ちなみに星香がこういう性格だと知
っているのは、俺の親友と星香の親友ぐらいだ。星香は本当に猫か
ぶりの天才だなと、改めて思った

そんな訳で、二人並んで歩いているのだが……

(視線を感じる……)

男子どものとてつもない嫉妬感が向けられている。確かに星香は顔
とプロポーションはいい。いや、凄すぎる。だから視線をよく向け

られるのだが、この視線は慣れるものではない、というか慣れたくない

「どうしたの？洋くん」

「へ？」

「どうやら俺は立ち止まっていたようだ。」

「いや、何でもない。今行くよ」

そう言って猫かぶりバージョンの幼馴染の後ろをついて行った

「ふう」

四時限目の授業が終わり、俺の大事な昼食タイム。成長ざかりの高

校生にはこの時間がないと生きてはいけない。そんな事を考えながら食堂へ急ごうとすると

「おーい！洋くん」

嫌な予感がするので振り向かない。いや、振り向きたくない

「振り向かないと……」

「何？星香」

何か危険な単語が飛びそうだったので、すぐさま声の主、葵星香の方へと振り向く

「一緒にお昼たべない？」

笑顔で言う星香、これは頭を縦に振らなければどうなるか分からない。クラスの男子達はいいなくなど言っているが俺には死亡フラグがたつたようにしか見えない！

「OKだよ」

「じゃあ屋上行こう」

そう言って歩く星香を追って、こちらも歩く。教室を出た時。もはや嫉妬感ではなく殺気があった事は気のせいだと信じたい

「はい、アーン」

大きい弁当箱から卵焼きを取り出してスプーンをこちらに向ける星香

「これって何？」

「何ってスプーンだけど」

「それは誰だって分かる！」

突っ込む俺、誰だって突っ込みたくなるような天然さ

「じゃあいいじゃんはい、アーン」

俺に拒否権はないらしい。そこで、おれは提案した！

「よし！賭け事をしよう！」

「賭け？」

「ああ、もし俺が勝ったら普通に食べる。しかしお前が勝ったら…
…俺はお前に食べさせられる。そして
俺に制限はあるが何してもいい権利を一回だけ使えるようにしてお
こう」

「本当？」

目を輝かせるバカ野郎。どうやら何してもいい権利に食いついたら
しいな

「本当だ！どうだ？やるか？」

「うん！やるやる！」

「よし、ルール説明だ、今からお前に一つ消しゴムを渡す。それを
右手か左手に隠して俺がそれを当てる
というゲームだ。どう？簡単だろ？」

「うん！勝ってなにしようかな…えへへ」

どうやらこの超バカ野郎はもう勝ったきでいるらしい。おめでたい
人だ

「はい、消しゴム」

そう言っただけで何処からか出てきたか分からない消しゴムを渡す。何
処からかは秘密だ！

「ようーいっくようー」

「三回勝負！ヨーイスタート！」

そう言って勝率五分五分の消しゴムどっちでしょう大会は始まった！

命令権は星香のもの(前書き)

お久しぶりです！ではどうぞ！

命令権は星香のもの

いきなりだが俺と星香の消しゴムどっちでしょう大会は最終決戦に持ち込む

今のところ一勝一敗の戦い。次に俺が星香の消しゴムがどっちにあるか当てれば俺の勝利。間違えれば地獄が待っている

「さあどっち？」

外側から見れば今、星香の微笑みは天使の微笑みだが全く俺にとっ
てそんな嬉しいものではなく、むしろ悪魔の微笑みだ。

「えーとえーとーんと」

考えているように見せかけて全くそんな消しゴムなどどつでもよく、
俺はどうにかして脱出する方法を考える

「早く決めてよ洋君。でもそんな考えている洋君も……エへへ」

バカ野郎がバカらしい笑顔……いやニヤニヤするとどこぞのオタ研
より気持ち悪いと思うのは俺だけなのか……？

そんな事考えていてもしチャイムが鳴ってしまうと星香の勝ちとな
ってしまい、何度言ってもいいが地獄を見る。いや、地獄以上のも
のを……！もういいや！

「はいこつち」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

俺の頭にはチャンピオンを決める時の効果音が流れる

「正解は……」

「正解は……？」

神様！女神様！仏様！何とかして俺に勝利の微笑みを……

「はい！こつちでした」

う……嘘だろ……ここは普通こつち系の主人公ならよっしゃー当たった！というハッピーエンドじゃねえの！初っ端から死亡フラグが立ってしまったのか……！恨むぞ作者！

「エへへ……私の勝ちだね」

「ち……畜生」

「はい、アーン」

俺の悲しい顔には気づかず食べ物をお口に入れようとする星香。

「アーン」

約束なので仕方ないから口に入れる

「美味しい？美味しいに決まってるよね。だって私が作ったんだもん、当たり前。私は洋君の好きな食べ物沢山知ってるよ。というか全部。このお弁当にも洋君の好きな食べ物しか入れてない。私は何でこんなに好きだってアピールしてるのに答えてくれないの？洋君は私が好きだもん。何時か答えてくれる。だって洋君だもん」

でたよ。よく分からんが超ハイスピードで何か呟く星香。すんごくおかしくなるんだよ。中学生の頃なんてもっと酷かった……いや、話すとき長くなるな。やめておこう

「じゃあ食べ終わったし命令するよ！」

命令って……俺は奴隷ですか？

「私と一緒にお風呂「却下」何でもいいんでしょ？」

「確かに何でもいって言ったが……俺は制限があるって言ったろ
そうしなきゃ俺は……」

言いかけてやめた。星香が調子に乗る

「もしかして私のボディに興奮するの？やっぱり私の事女として見てくれてたんだ〜良かった〜」

そんなんで喜んでもらっても困る！

「とにかくそれ以外！俺の許容範囲だとどうするんだ？」

「うーん洋君は厳しいからなー」

寝る事はとても大変な事！1

あつというまに授業が終わる。俺は今だに消しゴムで負けた事に後悔しながら帰り道を一人で歩いてた
え？星香はいなかった？あいつは猫かぶりの天才だ。他の女子とでも帰ってんじゃね？あーだるい

「おーい！洋！」

「何だよ？」

声の方に振り向くと唯一高校で星香の本性を知っている山田剛がいた

「何だ山田か。一人にしてくれ。今はお前と帰れるほど元気じゃない」

その言葉に最初は首を傾げていたが、直ぐに分かったような顔をして

「葵さんの事か。お前も大変だよな」

「大変ってレベルじゃねーよ」

「わかった、わかった。で、今回は何があつたんだ？」

そう言った山田に事情を説明する

「あーなるほど。そりゃ嬉しいよなー」

「全く嬉しくないぞ」

「お前はそうだろうけど葵さんは学園のアイドルだ。俺に葵さんがそんな事言ってくれたらおれは多分失神するな。うん」

こいつに相談したのが間違いだったな

そう思ったのが伝わったのか直感なのかどっちか分からんが山田は直ぐに否定して

「ごめん、ごめん。無駄口をたたいたな。で、アドバイスなんだが……」

そう言っで一呼吸おく。雰囲気緊張してしまう。なんだよこれ

「我慢する事だ」

「我慢する事？」

「その通り。お前は葵さんに突っ込んだりするからいけないんだ。黙っとければ良い」

なるほど、と思う

「りょーかい！夜にやってみる」

「おーやれやれ。何事も試してみる事が大事だ」

「じゃあ俺はこじで」

「ああ。じゃあな」

と言っても別れた。山田がこんな言葉を言ってる事をしらずに

「葵さんに効く可能性は……ないに等しいけど」

「えへへー」

「星香、そのニヤニヤした気持ち悪い笑を止めなさい」

夜、歯を磨きながら帰ってからずっとニヤニヤした笑をしている。
どっかの殺人鬼が殺した時の笑い方だな。実際に見た事ないけど

「だって久しぶりなんだよ！一緒に寝るのは」

「だからってそのニヤニヤは街頭アンケートで百人中百人がおかし
いって言うと思うぞ」

実際に聞いてみる！とんでもない変人がいない限り絶対におかしい
って言うぞ！……まあこの世の中そっちの方が多いがな……ああ

そう思っていると何時の間にか自分の歯磨きタイムは終了しており、
自分の部屋に向かっていた俺達。認めたくないが俺達

「えへへ〜洋君の匂いー」

部屋についた途端、俺のベッドに飛び込む

「いいからどけ。俺が寝れん」

「はいはい」

そう言って右側にずれる星香。俺は左側か

「電気消すよ」

「OKだよー」

電気を消す。ここからが俺の地獄の耐久タイムが始まった

と、思った瞬間！

こいつ、足を絡ませてきやがった！

「えへへ」

まだ地獄の耐久タイムは始まったばかり……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9770u/>

俺を困らせるヤンデレな幼馴染

2011年8月10日17時21分発行